

吉田秋祭 おねり



※筆字:中澤 京苑

近世後期から現代まで
脈々と受け継がれてきた祭礼行事

愛媛県指定無形民俗文化財
よしだ あきまつり しんこうぎょうじ

吉田秋祭の神幸行事

八幡神社での伊勢踊りや卯之刻相撲などの行事にはじまり
古くからの町割りや面影が色濃く残る
吉田陣屋町で練り上げられる
祭礼絵巻ながらのおねり行列
鹿の子が舞い踊り
牛鬼や練車、御船、宝多などが練り歩く
時代を越えて、今なお残る貴重な無形民俗文化財
それが「吉田秋祭の神幸行事」



11月3日 (御幸祭)
11月2日 (例祭)



吉田秋祭保存団体協議会

吉田秋祭の神幸行事のあらまし

吉田秋祭の神幸行事(愛媛県指定無形民俗文化財)は宇和島市吉田町立間に位置する八幡神社のほか吉田町の中心部で行われています。

現在、この行事は毎年11月2日と3日に行われ、八幡神社での例祭(2日)に始まり、伊勢踊りの奉納、翌3日には卯之刻相撲の奉納、神輿の蔵出しが行



われ、躍動感あふれる鹿の子の舞い、勇壮な牛鬼、楠木正成・太閤秀吉・武内宿禰らの人形を載せた屋台(「山車」又は「練車」とも呼ばれる)を曳いて町内を練り歩く「おねり(「お遡り」、「お練り」とも表記)」と続きます。おねり行列には、様々な練物が多数登場し、祭り当日は老若男女を問わず町は大いに賑わいます。

江戸時代からの町人による氏子主体の祭礼組織が現在にまで維持されていること、江戸時代の吉田藩士らが参加した「御用練り」なども行われており、典型的な江戸時代の大名祭りともいえる都市祭礼が継承されていることが、民俗文化財として非常に高く評価されています。

また、「牛鬼」や「鹿踊り」といった南予独特の祭礼文化の特徴を兼ね備え、この地域を代表する祭礼であるという特色も有しています。



ACCESS アクセス

【JR】JR松山駅～伊予吉田駅
.....約1時間15分

【車】松山自動車道一大洲道路(無料区間)一三間IC
三間ICを出て約11km約1時間15分

【文化財指定に関する問合せ先】宇和島市教育委員会 文化・スポーツ課 ☎0895-24-1111(代表)



※各時刻は平成30年度の予定時刻です。



吉田祭礼絵巻(利根翠塙模写本)
※一部加工
 全長約9m、幅約20cmの着色絵巻です。
 吉田藩士の利根翠塙が1917(大正6)年に描いたものですが、
 1835(天保6)年の絵巻を写したものとされています。



八幡宝多
 宝多(ホタ)は大きな頭こそ印象的ですが、その一方で通常の天狗や鬼といった仮面の仮装者たちが、大きな頭の下は胴体の布だけがあつて両手がなく(出ておらず)、その下に足だけが見える独特の風貌です。
 観衆に絡むように暴れてまわり、一定の広さを確保して神輿の入る場所を清め払います。またその間に子供たちの頭を噛むような仕草で、健康を祈願するため、幼い子供連れの親子が宝多に噛んでもらおうと、宝多の周りは大いに賑わいます。



七福神
 練車人形の二つである恵比寿を除いた六福神の面や装束を着た子供達、恵比寿を乗せた練車とともに練り歩きます。

四ツ太鼓
 吉田の四ツ太鼓は、本来は太鼓昇山であつたため、二本の担ぎ棒が今でも残されています。太鼓を据えつけ、勾欄のついた張り出しが四方をめくり、四本柱にむくり破風の屋根をつけています。
 4人の男児が四方の張り出し部に乗り、「よいやっせ」と掛け声をかけながら太鼓を打ち鳴らします。そのため、地元ではこの四ツ太鼓を「よいやっせ」と呼ばれています。

御船
 吉田藩主の御座船「八幡丸」をモデルとしており、周囲の幕には伊達家の家紋が付けられている豪華な和船です。



御用練
 祭礼絵巻さながらに、袴や羽織袴を着用した侍が行列の先頭を歩きます。

練車
 練車の構造は、屋根付き二階建て四輪の曳山です。上段は高欄を巡らせて人形を載せる「人形屋台」で、下段に三味線、太鼓、鉦などの囃子方が乗り込みます。
 なお、練車の懸装品(けそうひん)として様々な部所で用いられている幕があります。祭礼絵巻さながらの絢爛豪華な幕で装飾された練車は、おねり行列の中でも一際目立つ練物となっています。



牛鬼
 牛鬼は元町鶴岡、浅川の輪番制で出しており、各地区は3年に一度、祭りに参加することになっています。この3地区は、江戸時代の初めに伊達家が入ってきたことにより、武家の家中町や本町、魚棚、裡町といった町人町が形成される前からあつた立間尻(たちまじり)と呼ばれる地域です。
 八幡神社のある立間の者は神輿を担ぎ、その先導役と言つべき牛鬼は、吉田藩成立以前から農業や漁業で生計をたてていた立間尻の者が担ぐ形になっています。

吉田秋祭の神幸行事の主な行事や練物



神輿
 神輿は、祭神の応神天皇、比売大神(ひめのおみかみ)、神功皇后の三体が渡御し、一番神輿(松)、二番神輿(竹)、三番神輿(梅)と区分されます。

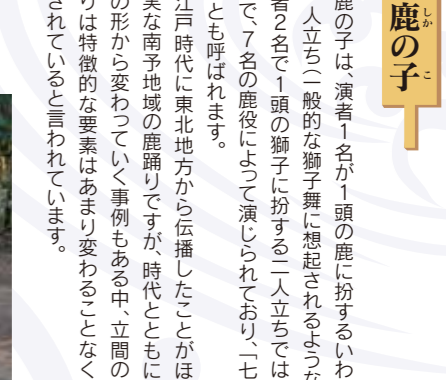


宵宮宝多
 八幡宝多とは異なり、頭から被るのではなく、宝多を片手に持ち、もう一方の手で口を開閉させます。
 宵宮(2日)と翌日、白装束を着た子供達が家々を訪ね歩くほか、おねりにも参加します。

猿田彦・御神餅
 「猿田彦」
 日本神話の中では、天孫降臨の際に道案内をしたとされる猿田彦命(さるたひこのみこと)に扮し、一本下駄を履き、帽子をかぶつた姿は2mを超えます。
 「御神餅」
 祭礼絵巻の中では、鯛や大きな鏡餅の造り物をそれぞれ二人で担いでいる様子が描かれていますが、練車と書かれている史料もあり、江戸期にも練車に乗せていた時期があつたと考えられています。
 現在は、大きな鏡餅と懸け鯛を乗せた練車とともに、おねりに加わっています。



鹿の子
 鹿の子は、演者1名が1頭の鹿に扮するいわゆる一人立ち(一般的な獅子舞に想起されるような演者2名で1頭の獅子に扮する二人立ちではない)で、7名の鹿役によって演じられており、「七ツ鹿」とも呼ばれます。
 江戸時代に東北地方から伝播したことがほぼ確実な南予地域の鹿踊りですが、時代とともに当初の形から変わっていく事例もある中、立間の鹿踊りは特徴的な要素はあまり変わることなく伝承されていると言われています。

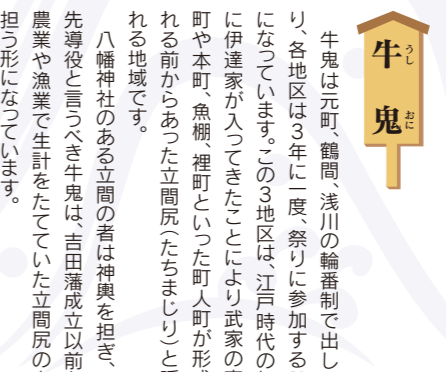


伊勢踊り
 11月2日の例祭後、1名が太鼓を演奏し、12名の踊り手は太鼓に合わせて唄いながら足を交互に出して調子を取ります。



また、各地区の人形は、関羽や武内宿禰、木正成、八幡太郎義家、太閤秀吉、恵比寿と様々であり、その装束や持ち物も当時に近い姿を今に残しています。

また、各地区の人形は、関羽や武内宿禰、木正成、八幡太郎義家、太閤秀吉、恵比寿と様々であり、その装束や持ち物も当時に近い姿を今に残しています。



魚棚2丁目/宝多 魚棚3丁目/恵比寿 魚棚2丁目/太閤秀吉 魚棚1丁目/八幡太郎義家 裏町2丁目/楠木正成 裏町1丁目/武内宿禰 本町1丁目/関羽